

マノン果たして「悪女」なのか？

◎村田京子

アベ・プレヴォーの『シュヴァリエ・デ・グリユーとマノン・レスコーの物語』(通称『マノン・レスコー』)は、1731年に出版された。「アベ (Abbé: 司祭)」という名前の通り、作者はカトリックの僧侶で『フランス教会史』の編纂の傍ら執筆したのが、7巻本の『世間から引退した貴人の回想と冒険』であった。『マノン・レスコー』はその最終巻の最後に組み込まれた一つのエピソードで、ルノンクール侯爵

こと「貴人」が知り合ったデ・グリユーという青年の告白が綴られている。それがヨーロッパ中で人気を博したため、『マノン・レスコー』は本体から切り離されて単行本として出版された。とりわけ19世紀のロマン主義時代から世紀末にかけて何度も再版され、戯曲やオペラ、バレエなどに取り入れられて、現在でも人気のある演目となっている。

原作の粗筋は、次のようなものだ。名門貴族の17歳の息子、シュヴァリエ・デ・グリユーは、アミアンで出会った美少女マノンに一目惚れをし、彼女とパリに駆け落ちをする(図1)。しかし、生活費が尽きると、彼は突然父の家に連れ戻される。マノンが隣家のブルジョワから金銭的援助を受けるようになり、父親に息子の居所を知らせたのも彼女であった。デ・グリユーは嫉妬や愛情の念に苦しむが、彼女を忘れて神学の勉強に没頭するようになる。二年後、サン=シュルピスの僧院にいる彼の前にマノンが突然、姿を現す。彼は彼女の不実をなじるものの、僧院を脱走してマノンへの愛に生きることを決意する。贅沢な暮らしを好むマノンのために、彼女の兄の紹介で賭博詐欺の結社に入り、いかさま賭博で生計を立てるようになる。さらに、マノンを愛人として囲おうとする放蕩者の老貴族GMを騙して、彼の金品を持ち逃げしたため、デ・グリユーはサン=ラザール、マノンはオピタルに投獄されてしまう。すぐに脱獄したデ・グリユーはマノンを救い出すが、今度はGMの息子がマノンに惹かれて彼女を囲おうとする。二人は息子からも金品を奪おうと企むが、

GMによって再び捕えられ、投獄されてしまう。デ・グリユーはすぐに釈放されるが、マノンはアメリカの植民地への流刑に処せられる。彼女につき従うことを決意した彼の愛情の深さに気づき、マノンは初めて自らの過ちを悔いる。植民地でも彼女に惚れ込んだ甥セヌレのために、首長がデ・グリユーからマノンを取り上げようとする。セヌレとの決闘で彼を殺してしまったと勘違いしたデ・グリユーは砂漠に逃亡するが、マノンも彼につき従う。しかし、彼女は砂漠で力尽き、彼の腕の中で死んでいく。

➤ の小説は、モンテスキューの批評※にあるように、見かけは「詐欺師と娼婦」のカップルでも、愛の力によって二人の犯した罪は浄化されるという愛情至上主義に基づき、高く評価されてきた。今回のバレエ公演では原作の内容が凝縮され、筋書きも少し改変されているものの、同じく愛情至上主義に基づく演出になっている。そして、奔放で気まぐれなマノンに何度も裏切られながらも彼女への愛を貫き、彼女を真実の愛に目覚めさせたという点で、物語はデ・グリユーの「絶対的な愛」の勝利で終わっている。マノンは悔悛して苦難の道を歩み、罪を償って死ぬことで初めて崇高性を帯びるのであり、それ以前の彼女は、将来を囑望された青年を墮落させ、運命を狂わせた「悪女」と見なされがちである。しかし、この物語はデ・グリユーという男の語り手(あるいは男の作者)による、言わば男の視点から描かれている。では、女の視点から物語を



図2 エティエンヌ・ジョーラ 《ラ・サルベトリエール [通称オピタル] に連行される娼婦たち》(1757)

読み直した場合、マノンは果たして「悪女」なのか、考察していきたい。

物語の舞台は、腐敗と墮落に満ちた摂政時代(1715年~1723年)のフランスで、賭博詐欺の結社に名門貴族が入会しても不思議ではなかった。また、デ・グリユーはサン=ラザールから脱獄する時に門番を殺害するが、その罪を問われることはない。格差社会にあって、身分の低い者の命は蔑ろにされていた。それに対し、当時、女性が結婚前に操を失えば、どんな場合でも「娼婦」扱いされた。女性には貞潔を求める一方で、男性の性的放縦には寛容な社会風土がその背景にある。西洋キリスト教社

※「男の主人公が詐欺師で、女の主人公がラ・サルベトリエール [オピタル] に連行される娼婦。このように設定された小説が人気を得ていることは驚くには値しない。なぜなら、主人公のシュヴァリエ・デ・グリユーの行為はすべて、愛を動機としたものなのだから。その行為がどんなに卑しいものであっても、愛は、いつでも気高い動機となる。そしてマノンもまた、愛している。それによって、彼女がどんな性格でも許されるのだ。」(Montesquieu, *Pensées*: Le Spicilège)

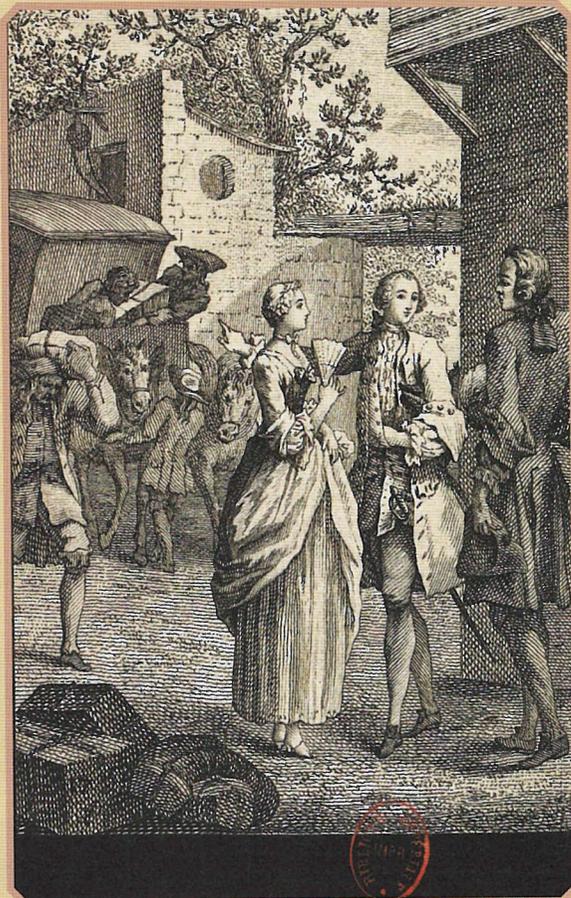


図1 二人の最初の出会いの場面 (1753年版の挿絵、バスキエ画)

マノン
は果たして
「悪女」なのか？

会では、伝統的に売春は「女のふしだら」によるものとみなされ、道徳的なダブルスタンダードが存在していた。すなわち、「男に許されることが女には許されない。男が道を踏み間違えてもそれは彼の過ちではない。しかし、女が身を誤ると、または男が身を誤った場合でも、悪いのは女のほう」であった(バーン&ボニー・ブロー「売春の社会史」)。それは、デ・グリユーが素行の悪い良家の子弟を収容する感化院に幽閉されたのに対し、マノンの方は娼婦を収容するオピタル(図2)に送られたことから明白である。さらに、マノンのような「娼婦」はアメリカの開拓地で働く男たちの伴侶となるべく、強制的に植民地に送り込まれていた。

マノンに近づく男たちは皆(デ・グリユーを除く)、彼女の肉体を「商品」として値踏みし、その評価に応じて金を支払おうと提案している。要するに、女の肉体のモノ化が生じている。マノンはいくつかの価値観を受け入れているが、彼女にとって、たとえ肉体がモノとして男の所有物になっても、それは感情のない肉体、心が分離した肉体でしかない。彼女にとって大事なものは「心の操」であり、その証拠に、デ・グリユーに宛てた手紙の中で、「あなたを愛するような形で私が愛せるのは、世の中であなたしかいません」と誓っている。そのうえ、不実な彼女にデ・グリユーが怒り、嘆くのを見て、マノン

は「あなたにこれほど辛い思いをさせたのですから、きっと私が悪いんですね」と謝りながらも「悪いと思ってやったことではない」と、自らの潔白を主張している。

方、心だけではなく「肉体の操」も求めるデ・グリユーにとっては、彼女の言葉は「恐ろしい欺瞞」でしかない。こうした両者の価値観のずれが矛盾に満ちたマノン像を生み出している。予測のつかない行動にでる彼女は、その捉えがたさゆえに、彼に弛まぬ不安と期待をもたらす。言い換えれば、彼女の謎を秘めた本質がデ・グリユーを惹きつけ、彼にとって何ものにも代えがたい値打ちを持つようになる。後に、ロマン主義の詩人ミュッセは「ナムーナ」と題される詩の中で、マノンを「生き生きと」して「真に人間的」だとみなし、「ああ！お前は軽はずみだがお前が生きていたならば、どれほどお前を愛したことだろう！」と謳っている。彼は、男の論理では測りがたいマノンの自由奔放さに惹きつけられていた。

しかしながら、マノンの行為、その存在自体が、女の貞節を重視する父権的な社会の枠組みを越えるもので、男を魅惑すると同時に恐怖を抱かせる。したがって、彼女を「悪女」とみなすか、社会的規範を越えた「自由な女」とみなすかは、読者次第だと言えよう。

村田京子 (むらた・きょうこ)

京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学、文学博士(パリ第7大学)。大阪府立大学名誉教授。専門:19世紀フランス文学・ジェンダー論。主な著書:『モードで読み解くフランス文学』(水声社、2023年)、『イメージで読み解くフランス文学』(水声社、2019年)、『娼婦の肖像—ロマン主義的クルチザンヌの系譜』(新評論、2006年)など。

